

おお大勝利

平成 28 年度山東サッカー部報第 19 号 (12 月 26 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

県新人 延長後半で米中に屈する

もう 1 カ月以上前の試合になりますが、年内中にレポートしておきます。敗戦に書く気を失ったわけでは決してなく、山東サッカー部は後期中間考査 (12/1,2,5) の前後 OFF を取りました (11/24~12/21)。その間私もサッカー部の活動を自制しておりました・・・というのは嘘で、敗戦後も翌週の県新人準決勝・決勝の準備運営、それが終わるとテスト問題作成、そして採点作業、それと並行して 3 年生のセンター演習と続きあわただしく、「今部報書くより、12 月 22 日の納会後に出そう」と考え、サボっておりました。

さて、試合は 11 月 19 日 (土) 県新人 1 回戦米沢中央戦。**米沢中央は、名古屋出身の元フロンティア選手 T 先生¹が監督を務めており、数年前は全国高校サッカー選手権にも出場した強豪。**地元の選手と名古屋の選手がうまく融合している (もちろん Y1 所属)。会場は米沢市営人工芝サッカーフィールド (略して米沢 SF)。小雨降る寒い、滑る bad condition。ただ、**悪いピッチでいつも通りプレーできる選手が良い選手**、というのは昔から言われる話。雪上サッカーをさせても、本当にうまい奴はうまいです。ともかく、この時期雨天クレーの試合じゃなかっただけありがたいと思わなければならない。**清野総監督**は不在でしたが、**我らが後藤報道局長**はいつも通りかけつけて下さる。学校からは、こんな寒い天候なのに、**田村教頭**がいらっしゃって下さった。「応援されている」と感じるだけでうれしい。もちろんいつも通り、多くの保護者がかけつけて下さった。つい先日 (選手権) までチームの一員であり受験勉強で超多忙な (はずの) **3 年ユート**も応援に来ている。選手権で悔しい敗戦を喫しているだけに、来季 Y1 に値するチームであることをピッチで示したいし、その上でももちろん勝ちたい。さあ、どうなるか。

試合が始まると、立ち上がりは米中に押し込まれる。FK からフリーでヘディングシュートを打たせネットを揺らされるも判定はオフサイド。「あっやられた！」と思ったが助かった。すると今度は山東が押し返し、低くて速い弾道の CK から、**2 年 CB カンタ**がニアでスライディング ⇒ フェアまでこぼれて **1 年 FW フトシ**に渡る ⇒ フトシ流し込めばいいだけなのに焦って浮かせてポストか GK か相手 DF に当て、大魚を逸する。その後は、一進一退。というか、**両チームともミスが多く、主導権を握るという形容が当てはまらない展開。**相手 DF の GK へのバックパスが大きく GK を外れ、そのままゴールに向かったシーンは何があったかよくわかりませんでした。ともかくボールはポストに当たりピッチ内に跳ね返った。山東、不運なのか幸運なのかわからない。そのボールを相手 GK が手で取ってしまったものだから、「味方のパスを GK は手で取ってはならない」というルール²に抵

¹ 国体に臨む少年の部の山形県選抜の監督でもある。

² このルールは、私がインターハイを戦った時には適用されていませんでしたが、その年の選手権から

触し、ゴールの至近距離で山東に間接 FK が与えられる。結局相手の作る人壁に当てしまい、タナボタ的なゴールにはなりませんでしたが、「両チームともバタバタしてて、やはり新人戦だな」と感じさせた前半。個人的には、先のフトシのシュートともに、「簡単なことは簡単にできないが、難しいことをなぜか難なくやってしまう」**2年左 SB リキ**のクロスボールに対して、逆サイドの右側からゴールに侵入した**2年ヤマノベの星 MF アダチ**がボレーシュートで合わせたシーンが特に惜しかったと感じる。ともかく、チャンスのには 6 対 4 で山東に分がある前半。

後半は徐々に米中に盛り返される展開に。この試合、山東 DF・MF の縦パスがカットされるシーン、やたら多く感じられる。もちろん山東 DF・MF が下手だ、と言えばそれまでですが、**米中ボランチの適切なポジショニングによってパスのコースを切られている**という理由もあるだろう。また、**米中の前線の選手はボールを引き出すウェーブの動きがうまい**。これは米中の選手に伝統的に感じられるプレーだが、この試合でもその動きに山東 DF 翻弄され始める。山東も、この試合急遽右 SB にコンバートされた**1年お笑い芸人タカヒラ**が相手に負けないマッチアップを繰り返したり、ちゃんと粘った戦いをしている。この粘りが重要で、**相手の流れの時に簡単に土俵を割るようでは、いつまで経っても安定した成績を残せない**。後半は 4 分 6 分の試合。結局両チームスコアレスで、延長突入。すごく寒いので、延長に入り審判団に申し訳なく感じる（今思えば）。

延長では前半は一進一退、しかし時間が経つにつれ米中ペース。延長に入り疲れが見えたところで**1年左 MF ヤマサン**交代。疲れが見えたというかね～、ヤマサンはまだ草食（動物）から抜け切れてなかったプレーだった。代わりに入るのは、去年の苗場で OB の**カツラギくん**（山東第 61 回卒）から「30 代になったらブレイクする」と予言された**2年アオキ**。ただし、この日のアオキのパフォーマンスは良くなかった。それもそのはずで、後に分かったことだが、そのときアオキは足首を骨折していた！ ずっと原因不明の足の痛みで悩まされており、「プレーしては休んで」を繰り返して、だましだまし県新人まで来た。こういうことがあると、最初の医者の見立ての誤りが犯す罪は深いと感じる。ということで、最後は凌ぐ時間帯が長くなってきた。それでもベンチでは延長後半は凌げそうと感じており、「PK 合戦か～。地区新人明正戦では酷い PK 合戦した³から、今度はもうちょっと良い PK 合戦したいけど」などと考えていたら・・・**最後の最後ミスが続き、タイムアップ寸前に失点。残念、最後に力尽きました。**

顧問としては、結果が出ず悔しいという気持ちは当然ありますが、それと同じくらいに、「**(2年ベジヤ 1年キクチャンを筆頭とした) 小さな山東の前線の選手たちが大きな米中のディフェンスをドリブル・パスで翻弄し、ギャラリーをアッとさせ**る」内容の試合を虎視眈々と狙っていたが不発に終わり、悔しい。「もっとやれるだろう」と思っていたが、「なんだ、この程度か」という失望あり。端的に実力不足！ だが、粘りある戦いをしたし、**球際の攻防という面では及第点の戦いだった**と思います。来季こそは、狙いを現実のものにした

適用されました。当時山東は、齊藤 GK コーチが DF や MF にスローし、攻める素振りをするもバックパス。それを繰り返して、後ろからビルドアップしているのか、自然な形で時間稼ぎしているのか、よくわからない戦いをしていました。新ルールが適用されたとき、「このルールだったらヤバかった」とキックに自信のなかった齋藤 GK コーチが話していたことを憶えています。時間稼ぎを封じる意味はありますが、前のルールの方が、後ろから丁寧にビルドアップする作戦を後押しする意味はあったと思います（現在のルールの方が GK を含んだビルドアップ能力が求められるようになったとも言えます）。私の一つ上の学年のチームも、私の代のチームも、機を見て後ろからつなごうとしていました。

³ 部報 15 号参照して下さい。

い。そう感じさせられた県新人でした。**寒い中熱い応援ありがとうございました。**

ともかくこれにて、今シーズン終了。**この部報も今年1年ご愛読ありがとうございました。**保護者の方々や OBOG の方々だけでなく、県内の指導者の方々（の一部）にも結構読んで頂いた。「ワタコーがさ〜」という私の言葉に、「鋼の股間ね」などの相槌を入れるモノ好き指導者もいて、作成冥利に尽きる。また、私の友人・知人も読んでくれている。私の幼馴染みで、現在は千葉で小学生にサッカーを教えている友人なんかは、「部報遅いよ」と催促までしてくれる。部の活動を報告しているだけですが、自分にとって貴重な情報発信の場になっていることは否めない。当初（平成 18 年度）山東応援歌のタイトルをパクリ「おお勝利」という名前で発行し始めたこの部報ですが、山東応援団団報と同じだったため変更を命じられ、ならばと「おお大勝利」で誤魔化してはや 11 年。**来年もよろしくお祈いします。来年は早速 1 月 3 日～5 日に恒例の埼玉遠征に出かけてきます！**（日程・予算案は別紙）

納会終了 三年生受験頑張れ！

12 月 22 日（木）**第 35 回**山東サッカー部納会が恒例の中島商店にて行われました。この企画、**マネージャーが作成した一年間の公式記録集**を片手に、OB 会がふるまってくださるすき焼き鍋を囲みながら、一年のまとめをするもので、今年で 35 回を迎えました。OB 会からは清野名誉会長・岸会長はじめ 7 名（齋藤 GK コーチ含めると 8 名）も集まって下さり、選手が少ない分、会を盛り上げて下さいました。

まず会長から今年一年の悔しさ嬉しさを総括するお話と 3 年生への受験の激励のあと、5 名の優秀選手賞を発表し表彰した後、乾杯（その 5 名と授賞理由は下の通り）。さまざまな作り方がすき焼きにはあろうかと思いますが、現役生は思い思いの「鍋」を作っておりました。途中、OB の方々から激励の一言を頂戴し、2 年生キャプテンの感謝の言葉があった後は、3 年生の決意の言葉。力強い宣言と心配になる宣言と両方ありましたが、**納会で蓄えたすき焼きパワーをぜひ勉強で発揮し、志望の実現に向けて頑張ってください。**

二次会は、これまた恒例の寿屋にて。おそば屋さんで飲むそば焼酎（焼酎のそば湯割り）は格別で、毎年楽しみにしているのですが、今年も堪能させていただきました。私も、センター指導に向けた英気を頂きました。ありがとうございました。

岡崎俊

声は大きい方ではなかったがピッチでの存在感は大きかった選手。もともとボランチをやっていて、攻撃を好む選手であったが、チーム事情により SB や CB として活躍した。ボールを自分の左側に置くことができず、右から寄せられるとボールロストする癖に悩まされたが、最終的には左 CB として難なくボールを左側に置いたし、左足でゲームメイクした。もともとスキルは高い方だったので、その成長は驚くものではなかったが、彼の努力をうかがわせる成長と言える。周りもよく見えていたためボールを収めるべきところはしっかり収めることができたし、大きなクリアが求められる場面でもボールを着実にミートして跳ね返した。またセットプレーの時には生き生きと前線に駆け上がり、ここぞという時にヘディングやスライディングで得点も決めた。大学でもぜひサッカーを続け、大好きな攻撃で活躍してもらいたい。

渡邊浩平

声が大きく、気迫で勝負する熱血派の CB。相棒の俊と全く違うタイプの CB。大柄で足が速く、パワーもあり、恵まれたフィジカルを持っていた。ただ、フィジカルに頼りスキルが

磨かれてこなかったため、トラップミスが多かったし、ドリブルを開始しても自らのスピードを制御できず「暴走機関車」と呼ばれたこともあった。ただ、ピッチ内外で「自分がやるんだ」という強い気持ちを発揮したし、その意味で責任感あるCBであり、責任感ある副主将であった。「スキルよりも気持ち」を押し出す選手としては、大築（山東 65 回卒）の正統な後継者と言える。ピッチを離れ複数人でのいる部員に声をかけると、必ずその中の一人である彼が受け答えした。責任感があり、コミュニケーションスキルにも長けた彼の特質を示す逸話である。今後はこの特質を活かし、器の大きなリーダーを目指して欲しい。

菅原悠太郎

フィジカルに恵まれた訳ではないが、山形二中仕込みの気迫のこもったスライディングと、カットインからの強烈な右足シュートの印象が強い選手。一時、体調の問題から選手としてではなくマネージャーとして活動し、皆の活動を支えた。しかし、サッカーにかける熱い思いを拭い去れず、ピッチ内に復帰し、選手として活躍した。ピッチを離れた時期からサッカーのコーチングの勉強を始め、上級学年になってからはグラウンド・マネージャーとして部活動をリードした功績も大きい。性格は温厚だがゴールに対する行動は獰猛そのもので、素晴らしいキック技術を活かして果敢にミドルシュートを放った。ゴールにしろ女性にしろ、妥協せず常に「最高のもの」を求める理想主義者であったが、笑いの沸点は異常に低く、つまらない話にも笑顔を絶やさなかった。今後も素晴らしい人間性を失わず、できればサッカーの指導者として活躍してもらいたい。

三井涼平

この学年の攻守の要の選手。入学時にすでにすべてのポジションを一定レベル以上にこなすサッカー理解の高さ・スキルがあったが、高校で球際の攻防やヘディング等の競り合いにも強くなり、入学当初よりサッカー選手として確実にスケールアップした。なかでもボールの持ち方、間の取り方が絶妙で、自分で仕掛けることも相手呼び込んで足を出させてかわして抜くことも、どちらも得意とした。2年生まではボランチの位置での「散らし屋」といった印象があり、配球にばかり長けていて前線の選手のサポートばかりしていたが、ドリブル・スピード・シュートどれも非凡であるため「もっとゴールを目指せ」「ゴールを決めろ」と周囲から要求があった。3年からはFWにコンバートされ、ゴールを決めまくった。悠太郎とともに、グラウンド・マネージャーとしてチームに貢献した功績も大きい。大学では堀込（山東 66 回卒）の後継者として、東北大学サッカー部で大暴れしてもらいたい（東北大学工学部 AOⅡ期合格内定）。

鈴木由斗

サッカー好きが集まるのがサッカー部とは言え、ここまでのサッカー小僧は他に知らない。とにかく、サッカーが好きで、技を覚えることに貪欲で、練習熱心で、サッカーに喜怒哀楽をぶつけられる選手であった。今野が赴任してから初めて、10月の選手権県大会まで引退せずに残り、後輩たちと共に汗を流した。練習後は自主連に明け暮れるため、「早く帰って勉強しろ」と何度声をかけたことか。スピードがそれほどある訳でもないのに、体の当て方がうまく、間をすり抜けるドリブルのスキルもあったため、相手チームの監督から「あの選手、スピードあるね」と誤解されることがしばしばあった。サッカーが好きだからこそチームメイトへの要求水準も高く、主将として部員にかける言葉には厳しさがあった。一選手としても、一リーダーとしても、まさに天晴れな高校サッカー生活だったと、ここに褒めたい。